



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	幼児における受動文と非対格動詞文の理解の比較 : yes-no 疑問文とwh疑問文を用いて
Author(s)	松山, 奈美; 伊藤, 友彦
Citation	東京学芸大学紀要. 第1部門, 教育科学, 54: 167-172
Issue Date	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/3856
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

幼児における受動文と非対格動詞文の理解の比較 — yes-no疑問文とwh疑問文を用いて—

松山 奈美*・伊藤 友彦

障害児教育**

(2002年10月31日受理)

1. 問題と目的

受動文は興味深い構文の一つとして言語学の領域において多くの研究が行われてきたが(中村・金子・菊地, 1989; 中村, 1991; 三原, 1994; 高見, 1995), 障害児教育の領域においては聴覚障害児にとって獲得が困難な構文の一つとして古くから知られている (Cooper and Rosenstein, 1966; Power and Quigley, 1973; Sarachan and Love, 1974; Wilcox and Tobin, 1974; Quigley, Montanelli and Wilber, 1976; 我妻・菅原・今井, 1980; 我妻, 1981, 1986, 1990a, 1990b; 小田島・都築・草薙, 1983)。

伊藤(1998)は聴覚障害を有する生徒21名の4コマ漫画の説明における格助詞の誤用を生成文法理論(原理とパラミターのアプローチ)の枠組みを用いて検討し、格助詞の誤用を含む文の多くは項構造が正しく、句構造もD構造のレベルまでは正しい可能性を指摘している。D構造は句構造の最も基本的な構造であり、名詞句やwhなどの要素が移動する前の構造とされていることから、聴覚障害児の受動文獲得の困難さの要因の一つは要素の移動であることが示唆される。

また、龍崎・伊藤(1999)は、聾学校に在籍する聴覚障害児を対象に、1) 直接受動文、2) 述語が自動詞の間接受動文、3) 述語が他動詞の間接受動文、の3種類の受動文を用いて聴覚障害児の統語知識を検討している。龍崎・伊藤はこの結果をもとに、受動文の獲得段階についての仮説を提案しているが、その中に、D構造からの名詞句の移動ができない段階が含まれている。伊藤(1998)、龍崎・伊藤(1999)の結果から、聴覚障害児の受動文の獲得には名詞句の移動の可否が重

要な役割を担っていることがうかがわれる。

ところで、受動文の獲得の困難さは聴覚障害児に固有のものではなく、健常児においても受動文の獲得は遅れることが知られている。したがって、聴覚障害児の受動文獲得の困難さを検討する前に、まず健常児における受動文獲得の困難さについて検討しておく必要があると思われる。そこで本研究では健常児を対象とした検討を行うことにした。

Fukuda and Fukuda (2001)は、特異性言語障害児(SLI: Specific Language Impairment)の複合動詞に関する研究を行っているが、その中で、健常幼児でも受動接辞(r)areを伴う複合動詞は遅れて獲得されると報告している。このことから、受動文の理解には名詞句の移動とともに受動接辞の獲得も関与していることが示唆される。

生成文法理論の枠組みを用いた健常幼児の受動文理解に関する最近の研究にSano, Endo and Yamakoshi (2001)がある。Sanoらは、受動文の理解が困難な理由が項の連鎖(A-chain)と呼ばれる、名詞句の移動にかかわる要因によるものか、受動接辞の存在によるものかを検討している。「に」句(例:「お母さんに」)と項の連鎖を有する点で一致し、受動接辞の有無のみが異なる構文である非対格動詞文と受動文の理解が比較された。対象児は3歳から5歳の健常幼児であった。それによると、非対格動詞文の正答率は、4歳児、5歳児ではチャンスレベルを越えたが、受動文の理解は4~5歳でもチャンスレベル程度であった。この結果を踏まえて、Sanoらは、受動文の獲得の遅れの原因は受動形態素の存在に帰すことができると述べている。

しかし、受動文の獲得の遅れを項の連鎖と受動形態素の二つの側面から検討した研究は少なく、また、幼

* 東京学芸大学大学院

** 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

児の反応は実験方法の影響を強く受けることから、Sanoらの結論の妥当性についてはさらに別の方法によっても検討してみる必要がある。そこで本研究では、受動文の理解の困難さの原因について予備的な検討を行うこととした。本研究の目的は、1) Sanoらと異なる方法を用いても非対格動詞文の理解と受動文の理解にSanoらと同様の差がみられるか、2) yes-no疑問文とwh疑問文の理解に差がみられるか、の2点について検討することである。

2. 方法

2. 1 対象児

対象児は保育園に通う4歳と5歳の健常幼児であり、4歳児18名、5歳児17名、計35名であった。対象児の年齢の内訳は表1のとおりである。

表1 対象児

	範囲	平均年齢	人数
4歳児	4:00~4:11	4:06	18
5歳児	5:00~5:08	5:04	17

2. 2 実験材料

本研究では動物が行為者と対象となっている刺激絵を用いた(図1)。刺激絵の数は位置反応の影響を避けるため、行為者と対象の位置を入れ替えたものを含め、計6枚であった。

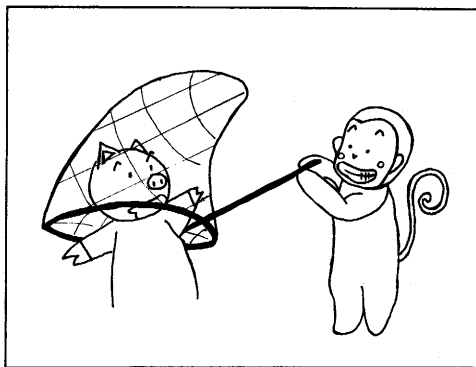


図1 用いた刺激絵の例

動詞は他動詞「つかまえる」、非対格動詞「つかまえる」、動詞の受動形「つかまえられる」の3つを用いた。刺激文として、wh疑問文(例: 誰がつかまえたかな?)と、yes-no疑問文(例: おサルさんがブタをつかまえたかな?)の2種類の疑問文を用いた。yes-no疑問文として、yesと答えた場合が正反応のもの1文と、noと答えた方が正反応のもの1文を3種類の文

(他動詞文、非対格動詞文、受動文)について用いた。wh疑問文については3種類の文を1文ずつ用いた。したがって対象児に提示した刺激文はyes-no疑問文が6文、wh疑問文が3文で、計9文であった(表2)。

2. 3 手続き

実験は個別に行った。対象児に絵を1枚ずつ提示し、描かれている内容を問う刺激文をyes-no疑問文とwh疑問文で提示した。その際、提示の順序による影響を取り除くため、対象児の半数には逆の順序で刺激文を提示した。発話はテープレコーダ(TCM-5000EV, SONY)で録音した。

3. 結果

3. 1 yes-no疑問文に対する反応

対象児の反応は正反応、誤反応、その他に分類した。なお、提示した刺激文で用いられた動詞とは異なる動詞を幼児自らが用いるという反応がみられたが、その場合は提示した絵の内容と一致する反応であっても「その他」として分類した。

図2はyes-no疑問文における他動詞文、非対格動詞文、受動文の正答率を年齢別に示したものである。図2より、4歳児、5歳児ともに、他動詞文の正答率が非対格動詞文、受動文よりも高い傾向がみられること、非対格動詞文の正答率と受動文の正答率にはほとんど差がみられないこと、がわかる。4歳と5歳の間にほとんど差がみられないことから、2つの年齢をまとめて3つの文の正答率を比較すると、3文間に有意差が認められ($\chi^2 = 29.4, df = 2, P < .001$), Ryanの法を用いた多重比較の結果、他動詞文と受動文、他動詞文と非対格動詞文の間に5%水準で有意差が認められた。

なお、「その他」の反応の中に、非対格動詞文(「つかまえた」)を用いた刺激文に対して「つかまえられた」という不完全な形式の反応と、「つかまえられた」という受動形を用いた反応がそれぞれ1名ずつに観察された。なお、受動形を用いた反応は、提示した絵の内容と一致するものであった。また、受動文を用いた刺激文に対しては、4名の幼児に他動詞「つかまえた」を用いた反応がみられた。そのうち2名の反応は提示した絵の内容と一致するものであった。なお、他動詞文を用いた刺激文に対して、非対格動詞文や受動文による反応は観察されなかった。

3. 2 wh疑問文に対する反応

yes-no疑問文の場合と同様、wh疑問文に対する反

表2 刺激文

疑問文の種類	文の種類	文
yes-no疑問文	他動詞文	おサルさんがブタさんをつかまえたかな？ ブタさんがおサルさんをつかまえたかな？
	非対格動詞文	タヌキさんがキツネさんにつかまったかな？ キツネさんがタヌキさんにつかまったかな？
	受動文	ウサギさんがネコさんにつかまえられたかな？ ネコさんがウサギさんにつかまえられたかな？
wh疑問文	他動詞文	誰がつかまえたかな？
	非対格動詞文	誰がつかまったかな？
	受動文	誰がつかまえられたかな？

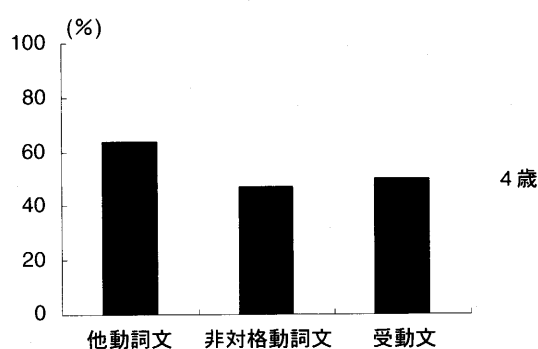


図2 yes-no疑問文における正答率

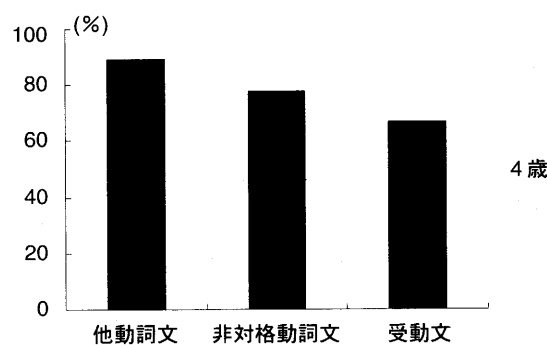
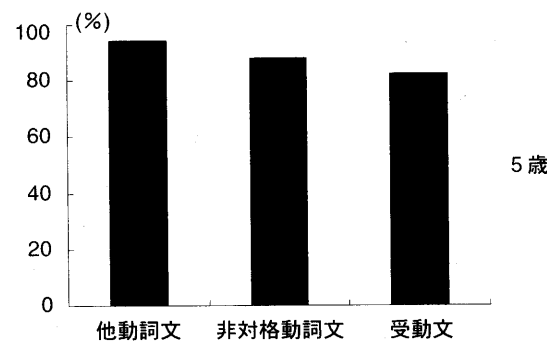
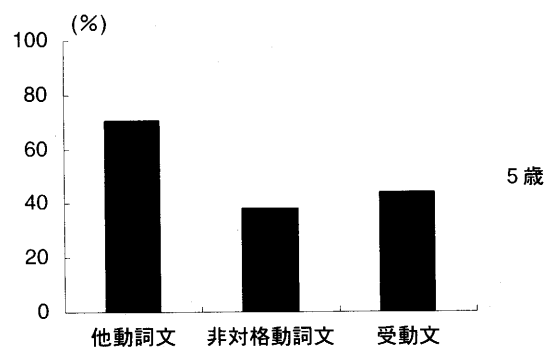


図3 wh疑問文における正答率



応も正反応、誤反応、その他に分類し、提示した刺激文とは異なる動詞を自ら用いた反応は「その他」として分類した。

図3は、wh疑問文における他動詞文、非対格動詞文、受動文の正答率を年齢別に示したものである。この図から、他動詞文、非対格動詞文、受動文はいずれも4歳、5歳において60%以上の高い正答率を示していることがわかる。4歳と5歳の間にほとんど差がみられないことから、2つの年齢をまとめて3つの文の正答率を比較すると、3文間に有意差は認められなかった。しかし図3から他動詞文、非対格動詞文、受動文の順で正答率がやや低くなる傾向があることがわかる。

「その他」の反応をみると、非対格動詞文の提示に

対して、1名の幼児に他動詞「つかまえた」を用いた反応が観察された。なお、この反応は絵の内容と一致するものであった。

3.3 yes-no疑問文とwh疑問文との比較

図4はyes-no疑問文とwh疑問文の正答率を文ごとと比較したものである。なお、3.1と3.2で示したように、yes-no疑問文においても、wh疑問文においても年齢間の差はほとんど認められなかったため、ここでは4歳と5歳をまとめて扱った。検定の結果、他動詞文、非対格動詞文、受動文のいずれにおいても、wh疑問文のほうが正答率が有意に高かった（他動詞文； $\chi^2=15.75$, $df=1$, $P<.001$ ；非対格動詞文； $\chi^2=13.65$, $df=1$, $P<.001$ ；受動文； $\chi^2=6.3$, $df=1$, $P<.05$ ）

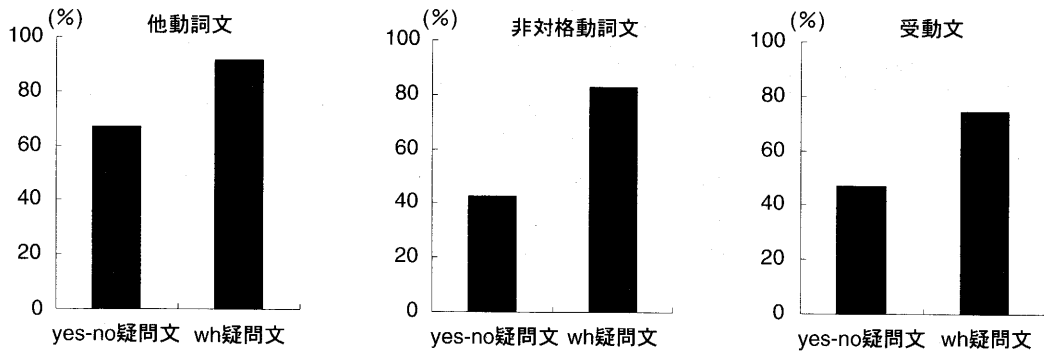


図4 yes-no疑問文とwh疑問文の比較

4. 考察

本研究により以下の結果が得られた。

- 1) yes-no疑問文では、非対格動詞文と受動文との間に差はほとんど認められず、両者はともに他動詞文の正答率よりも有意に低かった。
- 2) wh疑問文では正答率が全体的に高く、3文間に有意差は認められなかったが、他動詞文、非対格動詞文、受動文、の順で正答率が高い傾向がみられた。
- 3) yes-no疑問文とwh疑問文を比較すると、いずれの文においてもwh疑問文の方が有意に正答率が高かった。

以下では、上記の3点について考察する。

まず、1)について考察する。本研究の結果、yes-no疑問文では、他動詞文の正答率が、非対格動詞文、受動文の正答率よりも有意に高かった。非対格動詞文では、D構造で目的語の位置にあった項がS構造が派生する過程で主語の位置に移動すると考えられている。また、受動文についても、D構造に移動規則が適用されることによってS構造が派生されると考えられている。以上のことから、非対格動詞文と受動文の正答率が他動詞文よりも有意に低かったのは、他動詞文は名詞句の移動を必要としないのに対し、非対格動詞文と受動文は名詞句の移動を必要とするからであると考えられる。このように、今回の yes-no疑問文の結果からは、受動文の理解が困難な理由は、非対格動詞文の理解が困難な理由と同じであり、項の連鎖の有無、すなわち名詞句の移動の影響が大きいことが示唆される。

本研究のyes-no疑問文の結果をSanoら(2001)の結果と比較すると、他動詞文の理解が非対格動詞文、受動文よりも成績がよかったという点では一致する。しかし、本研究ではSanoらと異なり、非対格動詞文と受動文で正答率に差は認められなかった。その原因としては方法の違いなどが考えられるが、今後の検討課題としたい。

次に、2)について考察する。本研究の結果、wh疑問文では有意差は認められなかったが、他動詞文、非対格動詞文、受動文の順で正答率がやや高い傾向がみられた。他動詞文が他の2つの構文よりも正答率が高い傾向があった理由としては、他動詞が基本となって非対格動詞と動詞の受動形が生成されている可能性が考えられる。非対格動詞は他動詞の語彙特性を基本としており(中村・金子・菊地, 1989, p.179)、また、動詞の受動形は他動詞に受動接辞(r)areが付加された形である。したがって、最も基本的な形である他動詞文は他の構文よりも理解されやすいと考えられる。また、受動文理解が非対格動詞文の理解よりもやや困難であったことについては受動接辞(r)areの存在が考えられる。

次に、3)について考察する。本研究の結果、yes-no疑問文とwh疑問文を比較すると、wh疑問文のほうが有意に正答率が高かった。この結果は、Sanoら(2001)の指摘と一致するものであった。以下では、このことについて考察する。三原(1994)によれば、日本語のwh句はS構造においても元の位置、つまりD構造の段階の位置にとどまっている。そのため、D構造からS構造が派生される過程で要素の移動を伴わない。要素(wh句)の移動のないwh疑問文の方が要素(名詞句)の移動を必要とするyes-no疑問文よりも正答率が高くなると予測されることから、非対格動詞文と受動文については、wh疑問文の方がyes-no疑問文よりも正答率が有意に高かったことは容易に説明できる。

では、yes-no疑問文において要素の移動を必要としない他動詞文においてもwh疑問文の方が有意に正答率が高かったのはなぜだろうか。今回用いたyes-no疑問文には項が2つ含まれていたのに対し、wh疑問文には項は含まれていない。項の数が多い方が意味役割と項とを結びつける過程で、作動記憶などの言語処理上の負荷が大きくなる可能性がある。他動詞を用いたyes-no疑問文の正答率がwh疑問文のそれよりも低かったのはこのためではないかと考えられる。

また、本研究の結果、非対格動詞文や受動文の提示に対し、自ら他動詞文を用いるという反応がみられた。一方、他動詞文の提示に対し、他の構文を用いた反応はみられなかった。これらの結果は他動詞が基本となつて動詞の非対格形や受動形が生成されていると考えることによって説明できる。つまり、困難な動詞の提示に対して容易な動詞を自ら用いて反応したと考えられる。

今回は健常幼児の受動文の理解の困難さを言語知識に関わる理論上の枠組みである「移動」と「受動接辞」との関係を中心に検討した。しかし、文理解は言語使用の一つの形態であることから、言語知識に関わる要因とともに、言語処理に関わる要因の影響も受けると考えられる。本研究は予備的なものであり、今回の結果と考察の妥当性については、今後、実験デザインに工夫を加え、対象児を増やして再検討される必要があることはいうまでもない。

5. ま と め

健常幼児における受動文理解の困難さの原因を検討するために、他動詞文、非対格動詞文、受動文を用い、yes-no疑問文を用いた場合とwh疑問文を用いた場合とで幼児の文理解を比較した。対象児は、4歳と5歳の健常幼児計35名であった。動物が行為者と対象となっている刺激絵を対象児に提示し、これらの絵について、他動詞文、非対格動詞文、受動文を含むyes-no疑問文とwh疑問文を口頭で提示し、それに対する対象児の反応を分析した。

本研究の結果、以下の点が明らかになった。

- 1) yes-no疑問文では、非対格動詞文と受動文との間に差はほとんど認められず、両者はともに他動詞文の正答率よりも有意に低かった。
- 2) wh疑問文では正答率が全体的に高く、3文間に有意差は認められなかったが、他動詞文、非対格動詞文、受動文、の順で正答率が高い傾向がみられた。
- 3) wh疑問文とyes-no疑問文を比較すると、いずれの文においてもwh疑問文の方が有意に正答率が高かった。

以上の結果について、要素の移動の有無、受動接辞の有無、などの点から考察を加えた。

付記：稿を終えるにあたり、本研究の実験にご協力いただいた、小平市立小川保育園ならびに喜平保育園、仲町保育園、上水南保育園の園長先生はじめ諸先生方、園

児のみなさんに厚く御礼申し上げます。

文 献

- 我妻敏博・菅原廣一・今井秀雄(1980) 聴覚障害児の言語能力(Ⅲ)－うけみやもらい文の理解－. 国立特殊教育総合研究所 研究紀要, 7, 39-47.
- 我妻敏博(1981) 聴覚障害児におけるうけみ文、やり・もらい文の理解. 聴覚障害, 36, 15-21.
- 我妻敏博(1986) 聴覚障害児の文理解方略に関する一考察. ろう教育科学, 28(1), 30-38.
- 我妻敏博(1990a) 聴覚障害児の文理解方略に関する一考察(その2). ろう教育科学, 32(1), 33-46.
- 我妻敏博(1990b) 聴覚障害児の文理解方略に関する一考察(その3). 聴覚言語障害, 19(2), 41-51.
- Cooper, R. L., and Rosenstein, J. (1966) Language acquisition of deaf children. *Volta Review*, 68(1), 58-67.
- Fukuda, S and Fukuda, S. E. (2001) An Asymmetric Impairment in Japanese Complex Verbs in Specific Language Impairment. *Cognitive Studies*, 8(1), 63-84.
- 伊藤友彦(1998)聴覚障害児における格助詞の誤用－言語学的説明の試み－. 音声言語医学, 39(4), 369-377.
- 三原健一(1994) 日本語の統語構造－生成文法理論とその応用－. 松柏社.
- 中村 捷・金子義明・菊池 郎(1989) 生成文法の基礎－原理とパラミターのアプローチ－. 研究社出版.
- 中村 捷(1991) 受動態の普遍的特徴. *日本語学*, (10), 54-64.
- 小田島牧子・都築繁幸・草薙進郎(1983) 聴覚障害児の受身文、やり・もらい文の理解に及ぼす話者の「視点」の影響. 聴覚言語障害, 38(2), 12-23.
- Power, J. D., and Quigley, S. P. (1973) Deaf children's acquisition of the passive voice. *Journal of Speech and Hearing Research*, 16(1), 5-11.
- Quigley, S. P., Montanelli, D. S., and Wilber, R. B.(1976) Some aspects of the verb system in the language of deaf children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 19(3), 356-550.
- 龍崎麻由美・伊藤友彦 (1999) 聴覚障害児の受動文における統語知識－項構造と句構造を中心にして－. 特殊教育学研究, 36(4), 23-30.
- Sano, T., Endo, M. and Yamakoshi, K.(2001)Developmental Issues in the Acquisition of Japanese Unaccusatives and Passives. *BNCLD 25 Proceedings*, 668-683.
- Sarachan, A. B., and Love, R. J. (1974) Underlying grammatical rule structure in the deaf. *Journal of Speech and Hearing Research*, 17(4), 689-698.
- 高見健一 (1995) 機能的構文論による日英比較－受身文、後置文の分析－. 柴谷方良・西村義弘・影山太郎 (編) 日英語対照研究シリーズ4, くろしお出版.
- Wilcox, J., and Tobin, H.(1974) Linguistic performance of hard-of-hearing and normal-hearing children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 17(2), 286-293.

Comparison of the Comprehension between Passive Sentences and Unaccusative Sentences in Young Japanese Children: Using Yes-No Questions and Wh-Questions

Nami MATSUYAMA* Tomohiko ITO

Department of Special Education

The purpose of this study was to compare the comprehension between the passive sentences and unaccusative sentences using yes-no questions and wh-questions. Subjects were 35 children aged from 4 to 5. Three types of sentences were used; passive sentences, unaccusative sentences and transitive sentences. Stimulus pictures were shown to the subjects. Stimulus sentences were then given to the subjects in the form of yes-no questions or wh-questions about the meaning of each picture. The major findings were as follows.

- 1) As for yes-no questions, almost no difference was observed between unaccusative sentences and passive sentences in the rate of correct responses. However, the rate of correct responses to these two types of sentences was significantly lower than for transitive sentences.
- 2) As for wh-questions, no significant difference was observed among the three types of sentences in the rate of correct responses. However, the rate of correct responses in unaccusative sentences was little higher than that of passive sentences. Moreover, the rate of correct responses of transitive sentences was slightly higher than for unaccusative sentences.
- 3) The rate of correct responses in wh-questions was significantly higher than that of yes-no questions in all three types of sentences.
- 4) No significant difference was observed between 4- and 5-year- old children in the rate of correct responses.

These results were discussed in relation to the competing hypotheses about the delay of the acquisition of passive sentences.

* Graduate Student of Department of Special Education